Monthly Magazine Nishijin Graph 2004

京都 西陣グラフ

6月
Vol. 565

特集 京で見る

雨の情趣に誘われて

歴史街道
西陣織工業組合は歴史街道を応援しています。

読者モデルが体験

特集●京で見る

雨の情趣に誘われて

あいにくの雨…。
それだけで、うっとうしいと思ってしまいませんか。
京の町は、雨の風情が似合います。
殊に、きものに和傘は、しっとりした趣が感じられ、
それもまた、京都ならではのもの。
京都で唯一、和傘づくりをされている「日吉屋」さんへ、
雨乞いの場所として知られる「神泉苑」、「雨宝院」へ。
そして降り続いても困る、と
雨止み地蔵の「仲源寺」へ
読者モデルの林静子さん、
ゆり子さんのお二人が訪ねました。

百年以上続く、京和傘の「日吉屋」さんへ。

雨が降れば傘をさしますが、日本人が傘を生活必需品として広く使うようになったのは、江戸時代の天明年間（一七八一―一七八九）以降のことといわれます。それ以前の雨具といえば、時代劇など雨のシーンに出てくる菅笠（すげがさ）と簑（みの）でした。傘も他の文化と同じように中国から伝えられたといいます。その和傘も昭和の初めごろまで一般的に使われていましたが、近ごろはあまり見かけなくなりました。その良さは、大きく広げたり、小さくすぼめたりと二段階に調節でき、すぼめて使えば風で雨が入らないようにと工夫されている点です。情緒がある、というだけでなく機能性にも優れているのです。

さて、この和傘を作っている「日吉屋」さんは、京都でももうここ一軒だけ、という希少なお店。五代目店主の西堀さんは、弱冠二十九歳、"和傘づくりは楽しくて、やりがいのある仕事"という頼もしい店主です。

「日吉屋」さんでは、千家御用達の本式野点傘をはじめ、蛇の目傘、舞傘、番傘などいろいろな種類の和傘を製造・販売されています。お店の二階でいろんな傘を見せていただきながら和傘について教えていただきました。まず、和傘の種類は、茶道の野点のときに使う野点傘。女性が良く使う蛇の目傘。ちなみに蛇の目傘は、開いたときにヘビの目の形に見えるところからその名が付いたといわれています。そして、日本舞踊に使われる舞傘。また旅館などで見かける屋号や紋の入った番傘などがあります。

林さんお二人の目を引いた舞傘は、色とりどりの小振りな傘で、赤や紫の単色に白で桜柄などが描かれています。"くるくるまわすと、とってもきれいね"と静子さん。"踊りに使う傘で防水はしてないんですが、浴衣のときに日傘として使われる方が増えていますよ"と西堀さん。

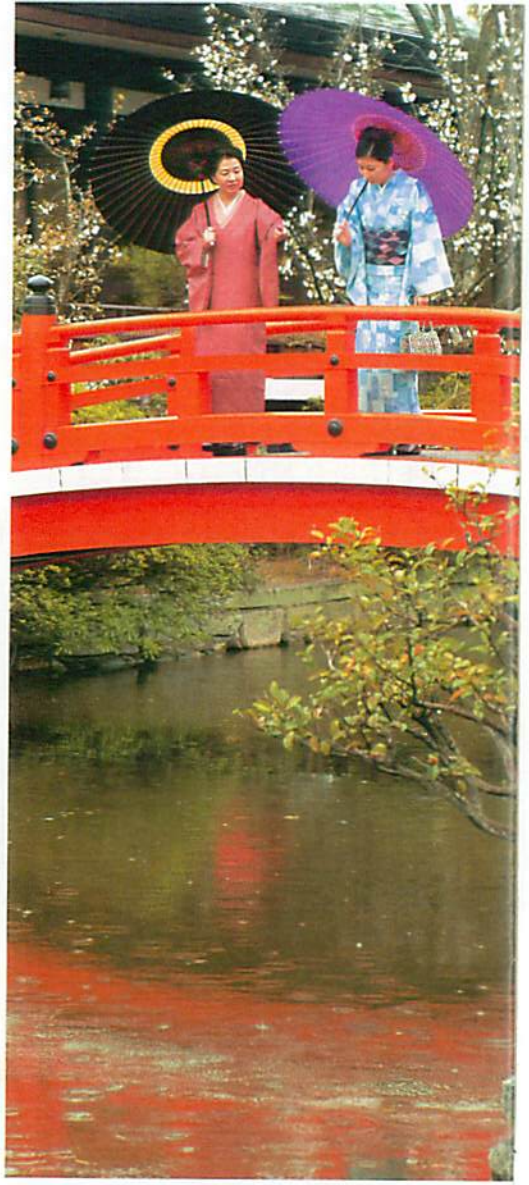
踊りに使う「舞傘」。
"日傘として使うのもいいですよ"と西堀さん。

雨を降らせる能力を持つ、善女龍王を祀る「神泉苑」へ。

平安京の遺跡として知られる「神泉苑」に着いたころ、雨も本降りになってきました。

「神泉苑」が雨乞いの場所として知られるようになったのは、天長元(八二四)年、京都では日照りが続いたため作物が枯れはててしまいました。これを見かねた天皇が時の高僧、弘法大師に「雨を降らせることはできるか」と訊ねたところ、「雨を降らす法を心得ております」といい、弘法大師は神泉苑のほとりに祭壇を築き「請雨経の法」という雨乞いの祈祷をはじめました。七日間祈ると、祭壇の上から金色の蛇を乗せた二五〇センチほどの蛇が頭上に現れ、池の中に姿を消しました。この蛇こそ雨を降らせる能力を持つ金色の龍、善女龍王で、にわかに雨が降り出したのです。以後、神泉苑では名僧が競って祈雨の修法を行うようになったと伝えられています。雨と水の神さま善女龍王は神泉苑の池の中にいるといわれ、林さんたちもこの当たり!?それとも、池の中を悠々と泳いでいるのかしら〟と、池に落ちる雨を見ながら楽しそうでした。

龍王さまの法雨により悪霊を祓い、清泉によって五穀豊穣、商売繁盛、子孫繁栄、恋愛成就を叶えてくださる霊験あらたかな神さまとして親しまれています。



心に願いをただ一つだけ念じながら渡ると叶えられるという「法成橋」。

京都最古の庭園「神泉苑」。

「神泉苑」は、延暦三(七九四)年桓武天皇が平安京造営の際に造られた庭園です。というのも今から三三〇万年前、京都盆地は大阪湾につながる内湾であったといいます。その後、完新世(氷河が溶け去った二万年前以後の時代で、現在に至る)の開始とともに、急速に京都盆地の湖底が隆起して陸地化がすすみ、とり残された湖底が、二条城の南側の神泉苑、洛北の深泥池、そして、宇治川の南の巨椋池であるといわれています。

このように、もともと湿地帯であったところを活用して庭園が作られ、常に清泉が湧き出すことから「神泉苑」と名づけられました。その広さは、南北四町東西二町という広大なもので、大池や釣殿、滝殿などがあったといいます。当時は、歴代の天皇や貴族たちが舟遊びや観花、鷹狩りなどの行事や遊宴を行ったといわれています。

和傘づくりを見学。

お店の二階は和傘の工房、西堀さんの仕事場になっています。特別に作られている様子を見せていただきました。

ちょうど、番傘を作られているところです。骨になる竹(二本の竹を均一に割った状態のもの)だけは仕入れますが、ここからは全て手しごと。まず、傘の骨格となる竹を糸で綴じて骨組みをします。骨の本数は傘の大きさによって異なりますが、だいたい蛇の目と番傘は四十八本、野点傘は六十本だそうです。次に、和紙(美濃和紙を使います)を貼ります。この作業を見せていただきました。和紙を貼る糊は、昔はわらび粉を使っていましたが、今は、何とタピオカの粉を水で溶き、焚いて練って使うそうです。一本一本の竹に刷毛でこの糊を付け、四分割にした扇形の和紙を貼っていきます。一度、和紙に糊が付いてしまえば貼り直しはできませんから神経を集中させ、一気に貼ります。素早い手さばきで和紙を貼っていく光景に〝うわぁ、見事。職人の技ですね〟とゆり子さん。和紙を貼り終えると色を付け、油を塗り、天日で乾燥させて完成です。ちなみに天日の乾燥は、お向かいの宝鏡寺さんの境内で代々干させてもらっているそうで、お天気のいい日は、傘の花が咲きます。竹や紙など自然の素材を使って丁寧に作られる傘、そこには西堀さんの愛情と温もりが込められています。

単に、雨を凌ぐ用具というだけでなく、和服姿の和傘には、その人自身をより奥ゆかしく見せる、そんな魅力をも秘めているように思います。

糊になるタピオカの粉を水で溶かし、焚いて練って糊をつくる。

「のき紙」といわれる和紙を貼った状態。

和紙を貼るとすぐ真鍮のヘラで抑えます。